

鳥獣センター通信

鳥獣被害対策に係る先進地事例調査を実施

令和元年11月25日から26日に県外先進地視察調査(佐賀県唐津市、長崎県川棚町、佐賀県鳥栖市)を実施したのでその概要を報告します。

佐賀県唐津市役所鳥獣害対策室

「唐津地域有害鳥獣駆除対策協議会」

唐津市では、イノシシ、サル、中小型獣、鳥類の被害が大きく、12年前のピーク時は1億円を超えていた。特にサル被害はイノシシに比べると被害額は少ないものの、群れに襲われるとハウスビニールを破ってみかんを食害するなど精神的苦痛を伴った。

そこで市は、平成20年に「鳥獣対策室(専任正職員3名+専任嘱託職員1名)」を設置し、隣接する玄海町と「唐津地域有害鳥獣駆除対策協議会」を設立。

○唐津市のサル対策

当初は、出没への対応に追われ、対策は後手後手に回っていた。また、メスの成獣を捕獲することで群れが分裂し、被害エリアが拡大する恐れもあった。

そこで、全てのサルを捕獲するのではなく、行政と農家が情報を共有することで、サルと共存し、被害を未然に防ぐ対策に転換した。3つの基本方針で対策を実施。

- ①棲み分け対策(工サ場、隠れ場解消)
- ②防除対策(防護柵の設置管理、追い払いの実施)
- ③捕獲対策(個体数管理、メス成獣は駆除しない)

○サルの生息位置調査

唐津市内に生息するサル4群に発信機を取り付け、2名×2組(4名)の調査員が、この発信機からの電波をアンテナで受信。

群れの居場所が特定されれば、調査員がタブレットに位置情報を登録する。

このサル4群の位置情報が、平日の夕方にサルメールとして希望者(農家)へメール配信され、市のホームページ上でも情報提供をしている。

調査員は地域住民に委託(退職者や農家)

調査に必要な発信器やテレメトリー機器は交付金を活用

○捕獲対策

箱ワナによるイノシシ捕獲が9割を超える。(平成30実績5,872頭)

市がワナの整備計画を作成(交付金活用)

銃、ワナ免許所有者45名を駆除員(実施隊)として位置付け。

補助者制度を活用。駆除員の補助として、ワナの見回りや工サの補充などを手伝う人を補助者として従事者証を発行(3地域54名。労力軽減により、駆除員の確保を図っている)。

★効果

日々更新されるサル位置情報の提供により農家自身が追い払いを意識するようになり行動予測による追い払いが可能になった。

捕獲して生息ゼロにすることが目的ではなく、農作物・人的被害がゼロになればよいので、個体数調整を重視し、効果が出ている。

ハラサンギョウ株式会社(長崎県川棚町)

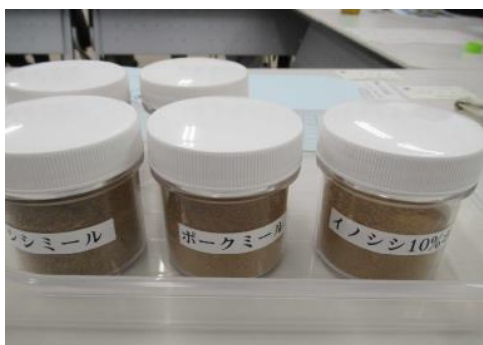
「有害駆除されたイノシシの処理、飼肥料原料としての利活用」

○会社概要

・食肉加工場からの不可食残渣を処理し、飼肥料の原料として出荷する「化製部門」汚泥を建設資材等の原料として出荷する「廃棄物処理部門」の2部門。
平成13年〜平成14年頃、BSE問題をつけ死亡獣の処理を取り扱つことになり、約8年前からイノシシも取り扱っている。



捕獲したイノシシを保管する保冷库



化製処理後ミール化されたイノシシは豚のミールと混ぜた上、飼肥料原料となる

○体制等

・市町村と契約し、市町村が設置した冷凍庫等からハラサンギョウが収集する、もしくは捕獲者本人が持ち込む。

○処理方法

・イノシシのほとんどは一般廃棄物として処理、焼却され、スラッグの原料となる。

・捕獲者本人の持ち込みで、電気止め刺し等を使い、鉛弾の影響が無い個体からは、ミールが得られ飼料原料として活用される。

・処理費イノシシ130〜140円/頭。

○捕獲者の反応

・山間地での埋設は、傾斜地や木の根があるなど大変なため助かるとの声。

○課題

・輸送までの搬入コストや保冷庫等を導入する際の市町村側の予算化がネックとなり、契約に至らない。

株式会社三生（佐賀県鳥栖市）

○会社概要

・捕獲用品の開発・販売・捕獲器の試験実証
コンサルタント、人材・地域育成等

○捕獲に取り組む際のコツ及び注意点

・捕獲器の性能やICT活用だけでは被害軽減は望めない。

・事前のリサーチが重要で、被害箇所センサーカメラを設置して、加害獣種の特定や数などそこに来るのか等を予想すること。

・爪幅、足幅で体重は推測できるので、加害獣に対応した捕獲器を用いること。

・捕獲に失敗した個体を捕獲するには難易度が一気に上がるため、加害個体の捕獲率を9割以上にすることが目標。

○ICT技術とは？

・捕獲できたことを通知するシステムや、モニターで映像を確認しながら捕獲操作するシステム等がある。

・ICT技術の導入に至っては、捕獲の基礎技術をきちんと習得しておくこと。楽しようとして導入しているところは、ほとんどが失敗している。

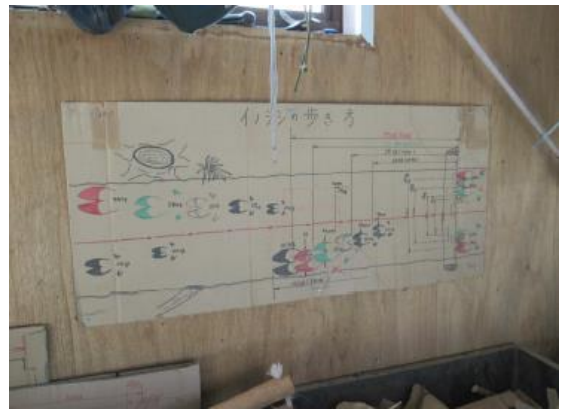
○ICT捕獲のポイント

・メリット
見て確認することで目的の獣・目的の数を捕獲することが出来る。

・デメリット

初期費用、ランニングコストの負担が大きい。精密機械なので耐用年数が5年位。

また室外利用するため、不具合発生頻度も高い。モニターで操作できるタイプは、操作が真夜中になることがほとんど。



事前のリサーチ（爪痕・歩き方・カメラの情報等）から加害獣を特定する。加害獣の（爪幅・足幅等）から体重を推測し、その体重に見合うワナを設置する。



奥行きが深い箱ワナを設置し、けり糸の高さ等を工夫する。捕獲しやすい幼獣だけでなく、親も含めて、群れ全頭を捕獲する。

調査のまとめ

今回の調査では、「他人任せ（行政や猟友会等）」から「自主防衛」に転換し、住民参加型による持続的な対策で被害が軽減した唐津市。ハラサンギョウでは、有害駆除後のイノシシの利活用。株式会社三生では、捕獲前の入念な事前リサーチや捕獲器の改良に取り組む姿が印象的であった。

被害軽減のための捕獲に関しては、被害農地に出てくる加害獣を捕獲することが大事。ワナ設置においては、設置前後の入念な下見やスレ個体を出さない工夫、失敗した後の検証を行い、改善し続けることが重要だと再確認できた。以上、各地域での鳥獣被害対策の参考にしたい。

被害対策に関する問合せ

西臼杵支庁及び各農林振興局
各市町村・各農協・各森林組合等

☆鳥獣被害対策地域特命チームだより☆

東臼杵（南部）地域

○令和元年度鳥獣被害防止対策研修会を開催

美郷町・諸塚村の14地区で今年度新たにワイヤーメッシュ柵設置を行う農業者が参加し、美郷町ニューホープセンターにおいて研修会が開催されました。美郷町では、平成26年以降の獣種別被害の推移は、シカによる被害が1位でしたが、平成30年度はイノシシによる被害が1位となり、シカによる被害を抜いています。

研修会では、普及センターから「獣から、みんなで守る集落づくり」と題して、鳥獣被害が激化する原因と対策、鳥獣対策リーダー（集落）として、これから取り組んで欲しい事について説明を行い、集落みんなで勉強して、みんなで被害対策に取り組める集落作りを目指すことで意識の統一が図られました。

次に、鳥獣被害対策支援センターからワイヤーメッシュ柵の設置および維持管理のポイントについて研修が行われ、参加者からは足場の悪い立地条件でのワイヤーメッシュ柵の設置方法や柵の補強方法等について、活発に質問が出されました。また、室内研修会後に実地研修が行われ、参加者はワイヤーメッシュ

柵の設置作業手順の確認を行いました。当該地区のワイヤーメッシュ柵は3月完成を目指し、11月から各集落で設置作業が行われています。



室内研修会



ワイヤーメッシュ柵設置実地研修

北諸県地域

北諸県地域では、平成30年度から地域の新たな品目として、ヘバスの産地化が進んできています。そのヘバス栽培において、野ウサギによる被害の報告があり、その対策の検討として、特命チームで実証ほを設置しましたので、今回は、この取組についてご紹介いたします。

実証ほを設置した山之口町富吉地区のほ場は、昨年春にヘバスを定植しました。しかし、定植後に野ウサギにより幼木の新梢が噛みさられる等の被害が発生しました。そこで、10月6日に「楽落くん」の実証ほの設置を特命チームで行いました。

「楽落くん」はタヌキや野ウサギ等の中型動物被害対策として埼玉県農業技術センターが開発され、「探索行動」という、動物が障害物に対して、危険ではないかと確認する行動を逆手にとった電気柵で、約30cmのネットの上に電線を張り、探索行動で動物がネットによりかかり、電線に触れた時に感電させ、ほ場内への侵入を防ぎます。

設置当日は、鳥獣被害対策支援センターから設置上の注意点等について説明を受けながら、生産者と特命チームの合計11名で設置を行いました。

ほとんどのメンバーが「楽落くん」の設置をするのは初めてでしたが、設置自体は難しい部分ではなく、約10a（柵総延長約140m）の作業は1時間程度で終了しました。

その後、「楽落くん」効果について検証を行いました。設置後は野ウサギによる被害はぱったりと止まり、被害防止効果の高さを実証できました。

この他にも、北諸県地域鳥獣被害対策特命チームでは、サル被害が増えてきている高城町片前地区をモデル地区と設定し、サル対策の検討も行っていきます。ほ場周辺への電気柵設置、GPSによる行動パターンの特定、大型捕獲檻の設置による生育頭数のコントロール、追い払い活動を行うことにより、地域住民の方が主体となったサルの被害軽減を目指します。



楽落くん設置作業の様子